

岩手医科大学歯学会第20回例会抄録

日時：昭和60年6月29日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部C棟6階講義室

演題1. 舌痛症の診断と治療法に関する検討

○南部淑文, 金沢治樹, 山口一成, 大屋高德
工藤啓吾, 藤岡幸雄

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

近年、口腔の各種不定疼痛を主訴として来院する患者が急増している。特に舌痛症は、舌の色調・形態・機能には何ら異常がなく、器質的病変が認められないのを特徴としている。痛みは、舌尖部や舌側縁部にピリピリやヒリヒリといった表在性のものとして発症する 경우가多い。しかし、その診断と治療には苦慮することが少なくない。そこで、私どもは最近の2年間に当科外来を受診した、いわゆる舌痛症の24症例について検討した。

まず主訴について検討してみると、ピリピリというのが8例、ヒリヒリが6例と多く、以下ピリピリ、ザラザラ・サラサラ・チクチクが各2例、ピリッ、ジーツ、乾燥感、異和感が各1例であった。尚、2様の主訴を呈した患者もいた。また、痛みの分類をしてみると、表在性に感ずるものが殆どで、他に間欠痛・限局性のものが多く認められた。部位別に分類してみると、舌側縁が13例と最も多く、以下舌尖7例、舌根2例、舌全体、舌背中央部、舌下面が各1例であった。更に年代別では、40代が7例と最も多く、以下60代が6例、30代・50代が各5例、70代が1例であり、性別では男6例、女18例の発症であった。

私どもは、舌痛症に対して臨床的に真性と仮性と分類を試みた。即ち、真性舌痛症の場合は誘発原因が不明なものとし、仮性舌痛症の場合は何らかの誘発原因が考えられるものとした。この結果、前者が20例に対して、後者が4例であった。この様に分類した意義は、治療の上でも大いに効果的であった。

そして、治療法においては、真性・仮性の両方においてマイナー・トランキライザー投与が効果的であり、かつまた仮性の場合には原因除去も併せて処置することが極めて重要であると強く示唆された。しかし、なかには症状の改善をみない難治性の症例もあり、これらにおいては今後更に心因的な分析も加えて検討を重ねる必要があると考察できた。

質 問：深 沢 肇（口外2）

CMI index と Y・G 検査 etc をなさらなかった理由をお聞かせ下さい。

追 加：舌痛症を真性と仮性とに分け、真性を舌に器質的な変化のないもので、心理的、神経的な障害が考えられるもの等と述べられておりますので、CMI, YG 検査等をなされればより科学的分析が出来たものと考えます。

回 答：南 部 淑 文（口外1）

資料等が不足で行なわなかったが、今後は行なう必要があると思う。

質 問：菅 原 教 修（保存2）

1) 舌痛症の治療法の一つに歯科処置としてリングルバーを使用していた義歯を再製作し治療されたとの事でしたが、義歯の製作にあたり、設計上等で考慮された点がありましたらお知らせ下さい。

2) 再制作された義歯は何科でつくられたのでしょうか。

回 答：南 部 淑 文（口外1）

リングルバーへの舌尖部接触による不快感による心因的な原因による舌痛症と診断し、心理療法を兼ねて義歯再製作を、義歯精査と併せて第一補綴科へ依頼した。

演題2. Palatal island flap による軟口蓋再建の一例

○柴田貞彦, 福田喜安, 工藤啓吾, 藤岡幸雄

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

口蓋島状弁は、1963年、Millard が、口蓋形成術に使用したのに始まり、その後、口蓋および中咽頭の欠損や洞口腔瘻の閉鎖などに応用されてきた。今回、われわれは、巨大な軟口蓋の多形性腺腫摘出後の欠損部を本弁により再建し、満足する結果の得られた1例を経験した。

患者は、58歳の女性で、口蓋部の腫瘍を主訴に来院した。昭和60年3月、当科を紹介され来院した。口腔内所見では、右側軟口蓋を中心に40×30mmの分葉状、境界明瞭な腫瘍が認められた。腫瘍表面は平滑で、毛細血管に富み、やや発赤がみられ、硬さは弾性硬で、軽度の圧痛を認めた。口蓋垂は、腫瘍により圧排され、健側に偏位し、軽度の嚥下障害がみられた。昭和60年4月8日入